

「ノルウェーにおける鯨肉サプライチェーン」

赤嶺淳（一橋大学）

1860年代に近代捕鯨を発明したノルウェー王国は、南氷洋へと進出し、1920年代に母船式捕鯨を完成させた。近代捕鯨が発明される以前、ノルウェーに商業捕鯨は存在せず、近代捕鯨は毛皮と脂を主目的としていたアザラシ漁から派生したものであった。他方、南氷洋捕鯨は鯨油を目的とした大規模なもので、第二次世界大戦中の停止期間をはさみ、1960年代後半まで続けられた。現在、ノルウェーでおこなわれているのは、ミンククジラの肉を目的とした沿岸捕鯨のみである。本報告では、①ノルウェーにおける近代捕鯨の歴史を略述するとともに、②ノルウェーでは、日本のように第二次世界大戦の前後で捕鯨を区別することがないことと、ノルウェーの南氷洋捕鯨のピークは戦前であったことの2点を指摘したうえで、③1993年以降の商業捕鯨再開以降の鯨肉の生産と流通、消費のサプライチェーンについて、ロフォーテン諸島の事例を中心に報告し、ノルウェー捕鯨の転換について指摘する。そのうえで、④鯨肉生産と鯨油生産を目的とする沿岸捕鯨と南氷洋における母船式捕鯨を区別することの重要性を指摘し、現在、鯨肉生産のみを目的としている日本の捕鯨との共通点を整理し、今後の商業捕鯨のあり方を展望したい。